

「言に根を下ろす」

ユダヤ人の思想家に、アブラハム・ヨシュア・ヘシエルという人がいるのですが、このヘシエルさんの著作に「Man is not alone: 人は一人ではない」という本があります。思想家の書いた本ということで、かなり内容は込み入っていて、正直、良く分からない感じです。そんな本の中に、こういう文章が出てきます。「哲学というものは、死んだ者が行きつく墓に根を張る木のようなものだ」。・・・ね、よく分からない感じでしょ。でも、まあ、ちょっと考えてみたいと思います。

多くの文系の学問がそうであるように、哲学という学問も「言葉の学問」です。ちなみに、神学も言葉の学問ですね。それは、ともかく、とりあえず哲学という学問の基礎は言葉であり、哲学は言葉の上に成り立っている。と、そういう風に捉えることができます。すると、このヘシエルさんの言う良く分からない表現もちょっと見えてくるかと思います。「哲学というものは、死んだ者が行きつく墓に根を張る木のようなものだ」。つまり、ヘシエルさんが言わんとしていることは、哲学というものは、死んだ言葉の上に成り立っている学問である、ということです。何故、哲学というものが死んだ言葉の上に成り立っているということになるのか。そこにはヘシエルさんなりの皮肉や批判を込めた色々な意味が込められています。ヘシエルさんによる鋭い指摘のひとつは、哲学がごく一部の知識人の間でのみ通用する、閉じられた学問になってはいないだろうか、ということです。まあ、これは神学も同じかも知れませんが、ちゃんと語る言葉を選ばないと「なんかよう分からん、小難しい話」になってしまいます。そして、もうひとつは、哲学で使われる言葉は、この私達が生きる世界のことを語っているようで、実はそうでもないじゃないか、という指摘です。哲学の言葉は、哲学という閉じられた学問の中で、ちょうど箱庭の中に砂場や海や川を作り上げるかのように、私達の生きる世界とは切り離された世界について語ろうと努力しているのかも知れない。ちょっと過激な言い方をすれば、哲学というものは、箱庭遊び同様に、言葉遊びに過ぎないのではないかと。哲学は、世界や宇宙、善や悪、生きる意味とか、神とか、人間とか様々な言葉を使ってはいるけれど、そこには実体が伴っていない。哲学は宇宙を知ろうとはせずに宇宙について語り、人間を知ろうとはせずに人間について語っているのではないかと。生きて巡る複雑怪奇なこの現実世界については、ほとんど無関心なまま、ただ空虚な言葉にだけ固執して、喧々諤々議論しているの

ではないか。・・・私も哲学には興味がある方なので、色々と本を読んでみて、うんまあ、確かに、哲学にはそういう空虚な側面があるかも知れないな、と思います。哲学の語る空虚な言葉は、この世界を語るための生きた言葉ではない。つまり、ヘッセルさんの言う、「死んだ言葉」ということです。

今日の聖書箇所舞台となっているコロサイという街の教会も、実はそういう、死んだ言葉が幅を利かせていたところでありました。当時のコロサイの教会は、ある異端思想が流行しつつありました。その思想というのは「グノーシス」と言います。グノーシスとは、本来は「知恵」という意味の言葉に過ぎませんが、イエス様が生きた、少し後の時代、少々やっかいな宗教思想として登場してきます。非常に広い意味を持つ「グノーシス」ということを、ごく簡単に説明すると、「今のこの世界には本当の神はいない。本当の神はもっと遠い宇宙にいるんだ」というそういう考え方でありました。この思想を掲げる「グノーシス派」というのは、とても合理的な哲学的な発想をする人たちでした。キリスト教信仰において、言葉では上手く言い表せられない複雑な問題や神秘的な事柄を、グノーシス派の人たちは、理屈や理論でもって克服しようとして、ある種独特の信仰の形を持つようになっていきました。その結果、イエス・キリストや神様は、不完全な存在として貶められ、グノーシス派においては、信仰の対象ではなくなってしまったのでした。それが異端として扱われるようになった大きな理由です。今日の聖書箇所 8 節の言葉「人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。」

このキリストに従うものではない、世界を支配する霊とは、「霊」という日本語訳にはなっていますが、原文では聖霊や魂とは全く違う言葉で、「一列に並んだもの」「物事の基本」という意味を持っている言葉です。初心者向けのハウツー本にあるような「料理のABC」とか「茶道のいろは」とか、そういう物事の初歩という意味でありました。新改訳聖書では、この「世を支配する霊」という表現は、「この世の幼稚な教え」と訳されています。なので、この聖書箇所であれば、「世界を支配する霊」というのは、人間的な感性や理屈に固執して離れられない考え方のことだと受け止めることができます。そういう「世を支配する霊」「この世の幼稚な教え」というものは、結果として、信じる者をむなししい状態にさせるものである、と聖書はいうわけです。

この手紙の舞台であるコロサイの教会にどのような信仰の危機があったのかは、想像するしかあ

りませんが、現代の哲学の最前線では、実はこういう事件がありました。宗教家、哲学者、作家、物理学者など、それぞれの道の専門家が、日常生活のお悩み相談や疑問質問に答えるラジオ番組においてのことです。こんな質問が来ました。「なぜ人を殺してはいけないのですか？」という質問。宗教家は、この質問に関して、この宗教家は仏教の方でしたが「それは仏の慈悲の心に反するから」と答え、作家も「殺してもいいよ、けど、そしたらあなたも殺されるよ」と答え、物理学者も「命とは非常に精緻な営みで、それを壊してしまうのは嫌いです」と答えました。けれど、哲学者だけ何も答えられなかった。きっと、この哲学者は知っている知識を総動員して、根拠のある確かな理論を導こうとした。けれど、哲学は基本的に世界の仕組みを解き明かすことに心血を注ぐ学問なので、「なぜ、してはならないのか」「なぜ、しなければならないのか」という道徳や規律について語ることは実は苦手なんですね。結果、倫理的課題に対しては門外漢の物理学者でさえ人を殺してはいけない理由を言えたのに、哲学者だけは言うことができなかった。この哲学者は、その後、結構なバッシングを受けたそうです。哲学は、この世界の「人殺し」をとめることができないのか、と。哲学は死んだ言葉の上に成り立っている、という先ほどのヘッセルさんの主張は、このラジオ番組の出来事において、図らずも的中してしまっていると言えるかも知れません。そして、かつてのコロサイの教会にも、合理的かつ哲学的な考え方に傾いていくあまり、人間の尊厳が蔑ろにされた深刻な問題が起きていた、とも想像できます。

私は哲学という学問には興味があります。世界を理路整然と解き明かそうと企む、その意気込みが素晴らしいと思いますし、それに何気ない日常の瞬間にハッとさせられるきっかけを与えてくれます。けれど、哲学は安心や穏やかさには繋がらないと思います。くっきりはっきり白黒つけるには複雑すぎるこの世界を生きて行くのに、論理的な哲学という死んだ言葉だけでは、とても心もとなく思います。少なくとも私には、筋の通った理路整然とした非の打ちどころのない理屈よりも、必ずしも言語化はできないけれど神様によって取り成された信仰の繋がりの方が心地よく、安心できます。

実は、今回の説教題の言葉は「言」一文字を当てています。この「言」一文字で表される「コトバ」には、普通の「言葉」とは違う意味があります。ヨハネによる福音書では、この一文字の「言」は、イエス・キリストのことを指します。つまり、「コトバに根を下ろす」という時、その「コトバ」を、ヘッセルさんの言った哲学とするのであれば、私達は世を支配する幼稚な教えに根差した、

虚しさの上に生えているしょげた樹木ということになります。けれど、その「コトバ」を死んで、しかし復活をしたイエス様であると受け止めるのであれば、私達はキリストの上に育つ生き生きとした樹木として、死を前にしても希望が枯れず、意気揚々と信仰の道へと歩むことができます。7節の箇所ですね。「キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい。」

イエス様という人は、人の痛みを知り、人の幸せを知り、人の悲しみを知り、人の喜びを知っている、そういう人でありました。福音書には、そのようなイエス様の姿をいくつも見ることができます。弱く、苦しむ人の傍にイエス様は寄り添い、声を掛け、癒しの御業を行われました。イエス様は、この世界を実際に巡り歩き、面と向かって人々と出会い、対立する勢力と喧嘩をして怒ったりする一方で、弟子や友を招いて宴会を催す、そういう人でした。イエス様は人の生きる世界を、ちゃんと知っている人だったと言えます。律法や哲学という言葉の集まりよりも、血の通った人間同士の集まりに身を置いて、溢れんばかりの喜怒哀楽を経験された人だったと思います。

「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。」私達は、そういった生きて、死んで、しかし復活をした「言」である、イエス様に結ばれた生活を送ることができますように。私達ひとりひとりが、キリスト・イエスにしっかりと根を張る一本の樹木であるかのように、日々、主の恵みと喜びを吸収しつつ、明日からも頑張っていきたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。今日も私たちのために、尊い安息日を備えてくださり感謝致します。私たちの住む、この世界には、たくさんの虚しいものが溢れています。それらは使い方次第、捉え方次第ではありますが、どうか、私たちが健やかに元気に過ごすために、賢く正しい選択をすることができますように、導いてください。そして、あなたとイエス様にしっかりと根を張り、嵐の時も、大波の時も、決して揺るがずに、主の道を歩み通すことができますように。あなたの信仰と知恵とをお与えください。今日から始まる1週間も、太く立派な樹木のように、堂々と生きることができますように。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。